文教福祉常任委員会　意見交換会報告

去る１１月１３日開催の発達障害児・者にかかわる各種団体との意見交換会について、その概要を報告します。

当日は、発達障害児・者親の会である「つみきの会」から会員の方５名と、白山市共生の街づくり推進協議会に参画している障害福祉事業所の方２名が出席されました。

今回、「発達障害児・者の現状と課題について」をテーマとして、御家族の立場から、障害福祉事業所の立場からそれぞれ現状と課題を発表していただき、それについて意見交換を行いました。その主な意見について述べさせていただきます。

初めに、出席者全員でゆるく軍手をはめて折り紙を折る発達障害の疑似体験をしました。うまくできないもどかしさや、できないのに頑張れ、やればできると励まされたときのいらだちなど、発達障害の方が日々抱く思いの一端を感じることができました。

次に、幼児期、学齢期のお子さんについての現状等をお聞きしました。

幼児期は親御さんが周りの子供との違いを感じ始める時期であり、自分の育て方やしつけが悪かったのではないかと悩み、周囲の目を気にして公園や児童館などにも行けず、家に閉じこもりがちになっている方もいらっしゃるそうです。また、家族が障害を受け入れられない、誰に話したらいいかわかないということで専門機関への相談につながっていないことも多いそうです。

お子さんの小学校での経験として、担任の先生に障害に対する知識や特別支援教育の経験がなく、親とのコミュニケーションもうまくいかなかったことから、お子さんが学校へ通えなくなったというお話しをお聞きしました。先生の資質が子供の学校生活に大きく影響することから、特別支援学級には特別支援教育についての知識や技術、経験のある人材を配置すること、市が専門家チー

ムをつくり学校へ派遣すること、支援員の増員と資質向上のための研修をふやしてほしいなどの御要望がありました。

また、白山市の中学校には現在、通級指導教室がないため、小学校で通級指導教室に通わせている保護者の方は、中学校の通常授業についていけるのか、高校へ進学できるのかと不安に思っていらっしゃるそうです。まずは中学校に１校でも通級指導教室をつくり、きめ細やかな指導ができる専任教師の配置を要望されていました。

委員からは、学校現場の実情は全くそのとおりで、そこを突破することはとても難しい。県が教員を採用し配置しているので、要望していくことは大事だと思う。専門家チームによるフォローは市の教育委員会でやっていると思うが、より手厚い支援や、支援員の増員を求めていく必要があるという意見がありました。

次に、青年期、成人期の方の現状と課題についてお聞きしました。

いま発達障害のある方が自宅で暮らし、自分がやりたい、人間らしい生活ができていても、親の高齢化や兄弟の独立などで、いずれは施設やグループホームしか行き先がないというのは問題であると親御さんは感じておられます。家にいるという選択肢を一つふやして、本人が選択できるようにしてあげたい。そこで高齢者の介護ヘルパーと障害者向けのヘルパーを同じ人にして、自宅に来ていただき、生活を維持していくという提案をされていました。ヘルパーが親ともコミュニケーションをとりながら、徐々にヘルパーのいる生活に慣れていくことで、同居をしながらも独立した生活を目指していくことができ、本人ができることもふえるという希望があるとのことでした。

また、職場でのコミュニケーションのために必要な道具であったｉPadの持ち込みを拒否されたという経験をお聞きしました。発達障害のある方にとってｉPadや絵カード、コミュニケーションボードなどの支援ツールはとても大切なものであることを理解してほしい、そういうものによる支援の方法が早く市民権を得られる日が来てほしいと訴えておられました。

障害福祉事業所の方からは、現在の支援体制の課題についてお聞きしました。義務教育の中学校までは支援があっても、高校からは途切れ、卒業後の就職までつながる支援ができない、専門的な支援を要する中で、障害の特性を理解してかかわることができる人材が不足している、福祉だけでは限界があるので、福祉と家族、行政、医療のすべてが連携できる体制の構築が必要であるとお話しされていました。

委員からは、かかわる人が変わっても個々の特性が引き継がれるような体系的な環境をつくる活動が大事で、ぜひそんなことができればいいとの意見がありました。

この意見に対して障害福祉事業所の方からは、継続した支援体制をつくろうと共生の街づくり推進協議会でも福祉、教育、医療にかかわる人が検討しているが、それぞれ課題だと思っていることがずれていたり、縦割りの考え方が根底にあり、なかなか自由な発言ができないという課題があること、進学や就職の際、福祉側の客観的な視点や親の意見を言える場があれば人生の長い流れを分断せず支援ができるが、実際それがうまくいかない現状にあるとのお話がありました。

ご家族からは、本人が障害の特性やこれまでの過程について話すことができないからこそ、専門家が作成した成長の記録が引き継がれていけばとてもいいとおっしゃっていました。

最後に、この意見交換会で現状や課題についてお聞きする中で、まだまだ社会の理解が足りていないと感じました。これからもお互いに理解を深め、白山市民すべてが安心して生活できる街づくりに向けて連携しながら考えていく必要があると思います。